

## 平成 29 年度 第 1 回羽島市総合教育会議 要録

日 時	平成 29 年 7 月 19 日 (水) 午後 3 時 45 分から午後 5 時 10 分
場 所	本庁舎 4 階 委員会室
出席者	<p>(出席委員)</p> <p>今井田眞千子委員 黒田淳委員 今枝甫委員 向井ゆかり委員 伏屋敬介教育長 松井市長</p> <p>(事務局職員)</p> <p>古川企画部長 山内教育委員会事務局次長 小川桑原学園校長 不破教育総務課長 増田学校教育課長 豊島生涯学習課長 箕浦スポーツ推進課長 竹内給食センター所長 田中総合政策課長 坂倉総合政策課政策調整係長 岡田総合政策課主事</p>
内容	<p><u>1. 開会</u> (会議の概要説明、資料確認)</p> <p><u>2. 松井市長挨拶</u> 次代を担う児童生徒に対する学習関係の様々な問題が露呈する一方、様々な形での文部科学省の取り組みがなされている。羽島市においても問題行動というなかでのいじめ、ひきこもり関係の専門的な委員会を作りご助言をいただいている。その中で懸念しているのが専門的な知識や経験を持っている資格者の考え方、感じ方と学校現場の教職員の感じ方、受け止め方にかなりの差がある。比較的学校現場の教職員が軽く論じていることが専門的な臨床心理士等の先生に言わせると重大な問題の端緒であるとのことである。 本日は桑原学園の現状とコミュニティスクールの推進の二点について、皆様からの忌憚のないご意見を賜りたい。</p> <p><u>3. 議事</u></p> <p><u>(1) 小中一貫教育について</u> 増田学校教育課長が、小中一貫教育の形態、市の目指す姿、期待されること、各学校の具体的推進内容及び計画等について説明した。 小川桑原学園校長が、4 月からの桑原学園の義務教育学校の取り組みについて説明した。</p> <p><u>(2) コミュニティスクールについて説明</u> 増田学校教育課長が、コミュニティスクールの概要、進捗状況について説明した。</p>

## 意見交換

(委員)

教科担任制によって先生の負担は増えるのか。

(小川桑原学園校長)

一人当たりの授業数はほとんど変わらない。行事の関係等で調整しなければならない時は調整役の教員にとってはやや負担が増えているかもしれない。

(委員)

前期課程の先生は1年生から5年生までは担任制なのか。

(小川桑原学園校長)

3、4、5年生も半分程度は教科担任制である。後期課程からという訳ではなく、免許教科については教科担任制と同じ状況を作っている。

(委員)

校章、校歌、制服はどうなるのか。校歌や校章等残しながら新しいものを作れないかと思う。

(小川桑原学園校長)

校章、校歌、制服の前に体操服に取り組んでいるが、保護者、子ども、職員、それぞれの検討委員会を立ち上げた。校章は今までのものを残した上で、共通のシンボルマークを作る、校歌を残しつつ愛唱歌を作るという形を検討している。せっかくの機会なので、子ども達も巻き込んで自分達が決めた、考えたというようにしたい。

(委員)

元々桑原小学校と桑原中学校の運動会是一緒で、花活動もずっとやっているの、子ども達にとって困ることはないと思うが、一緒になって9年生が1年生の面倒をみるということは大変良いことなので、他の学校にもどんどん薦めてほしい。

(伏屋教育長)

教員の負担の関係だが、国の義務教育学校の教職員配置に関しては、元の小学校及び中学校の教職員を合わせた数の配置となっている。

(委員)

良い例のノウハウを他の学校と共有してほしい。桑原学園は義務教育学校だからこそ9年間という連続した期間での教育ができるが、施設分離型だと小学校と中学校の連続した教育はなかなか難しく、差が出るのではないか。まずは行事連携、その先に

内容

内容	<p>は相互乗り入れの授業交流による連携をすることが、羽島の学校全体のレベルアップの一番のポイントだと考える。教育現場が大変だと言われるなか、教職員が疲弊しないように注意してほしい。</p> <p>(伏屋教育長) 学校が離れていると難しいという他の学校の意識改革をしていきたい。</p> <p>(委員) 中学生に求められるものが多くなり負担が多くなるのではないか。</p> <p>(小川桑原学園校長) 白川学園は9年生がすべて取り仕切る方式をとっている。9年生の育ちは良いがすべての負担がくる。桑原学園は6年生と9年生のリーダーを置き、ほぼ同じ立場で取り仕切っている。9年生だけの負担にはなっていない。どういう効果を生むか検証していければ、施設分離型であっても活用できるのではないか。</p> <p>(委員) 施設分離型でも作品や給食の放送等でコミュニケーションがとれたり、各々の学校で表彰された子どもを他の学校で紹介したりできたら良いと思う。良い例を子ども達には目標にしてもらいたい。</p> <p>(小川桑原学園校長) 後期課程で活躍した子どもを前期課程でも紹介した。憧れを持って見ることができる。</p> <p>(委員) 義務教育学校と普通の小学校では6年生の立場が違うのでどうなるのかと思っていたが、児童会と生徒会が別々であることでそれぞれに責任があるのですごいと思う。中学校との連携も必要だが、小学校間の連携も必要ではないか。</p> <p>(松井市長) 地域ぐるみの桑原学園といった評価判定をしていただければ良い。 学校区と自治会が非常に変則的な形の中で、学校経営者としての総合的なコンセプトが中学校長と各小学校長の間で共有した理念が醸成されているのか懸念している。次に帆を進めてほしいのは、一小学校一中学校の中央小、中央中である。理念を一つにするステップを早めに組んでほしい。中島中学校は学力やその他のレベルが高い。施設分離型というデメリットはあるが、桑原学園の先進事例に基づいた意識の共有をしてもらいたい。竹鼻小学校区では直面する問題行動等に対する正確な捕捉をして、</p>
----	---

そこで起きている課題についての正面をきっての対応を別課題として捉えてほしい。また、各コミュニティスクールの目標は今の時点ではあくまで漠然とした目的となっている。この目標の精度を高めるために、校長、教頭等の意見交換が必要であり、その上で保護者の意見を噛み合わせないといけない。いつまでにどのタイムテーブルでどこまでの目標水準を定めて、場合によっては数値目標といったスキーム作りを急ぐ必要がある。あくまで目的と目標は違う。目的は先生方の理念、目標はその理念に応じたタイムテーブルに基づく数値等を利用した設定である。もう一度原点回帰して考察を深めてもらう必要がある。

(伏屋教育長)

全国的にも早い段階での義務教育学校の誕生に合わせて、市内全学校の小中一貫教育を始めたが、校長の経営理念の共有化が今後の大きな課題である。また、コミュニティスクールも校長や地元の方々の理念の確立が課題になってくると思うがそのあたりはどうか。

(委員)

学校の特性、地域性がそれぞれ違う。9年間見通したら一本の線として出口のアウトプットがしっかりしていないといけない。学校運営協議会制度で決めていくことは、教育課程や人事等いろいろある。実際、一般の人に教育課程といっても分からないと思うので、まずは行事連携を進めるべきである。町内に住んでいた人が行事を通して知り合ってお互いの顔が見えることで地域の絆に繋がると思う。前身の学校懇話会のメンバーがそのまま学校運営協議会にいる場合が多く、授業参観をして感想を言って終わりで提言を受けるだけとなってしまっただけでは、今までと大して変わらない。焦点を絞った問題提起をすることで地域の方も意見を言いやすくなるのではないかな。

(委員)

コミュニティスクール化して地域の学校というなら、子どもの有無にかかわらず多くの人に開校されるとみんなが来やすくなるのではないかな。

(委員)

子どもが活動していることに対して地域の意識が薄い。学校の懇談会でも全然人がいないので、学校にもっと興味を持つ親になってほしい。小中一貫というのであれば、小学校や中学校の情報を相互に発信していければと思う。

(委員)

P T Aでは、校区と自治会が違っている学校は大変苦勞しているという話は聞いたことがある。地域とP T Aはよく話し合っただけで意思疎通を図るしかない。コミュニティスクールについても、目指していく子どもの将来像をほとんどの地元の方は答えられ

内容

ないと思うので、徐々に考えるべきである。子どもと触れ合うことは好きだという方は多くいるが、学校運営協議会の場で子どもの目指す姿について話すのは難しい。

(松井市長)

複数の小学校の子ども会やPTA活動、スポーツ少年団、その他愛好団体のいろいろな行事があるが、調整をするのが第一のステップである。それを説明できる学校長になってもらいたい。地域に迎合するのではなく理論立てをして協力を願う理念を持ってもらいたい。都会へ行ってもUターンやJターンで帰って来てもらえる郷土学習を学校のカリキュラムに組み込めないかというのが国の考えである。引きこもりやいじめについて正確に情報発信し、対応策を講じていることを保護者の方を含めて地域の方に説明するのが当面の課題である。毎年80件程度の引きこもりがあるが、半数程度減ってはその分新規で発生している状態である。コミュニティスクールは急がず、しかし一方で情報交換を綿密にしながらステップバイステップでの積み上げをして推進をお願いしたい。

(閉会 午後5時10分)

内容